

両親・教師からの褒められ・叱られ経験と 自尊感情の関連について II

The Relationship between Self-esteem and Experiences of Being Praised/Told-off by Parents and Teachers II

井上清子*

Kiyoko INOUE

要旨：児童期における母・父・教師からの褒められ・叱られの頻度、内容とその後の自尊感情の関連について明らかにする目的で、大学生415名を対象に、質問紙調査を行った。自尊感情尺度得点と、母親・教師から褒められた頻度に相関がみられた。一方、自尊感情尺度得点と叱られた頻度には、有意な相関はみられなかった。すなわち、児童期に褒められることが多いほど、自尊感情が高くなることが示唆された。褒められた内容について、*t*検定を行った結果、両親や教師とも、礼儀・他者への気遣いと性格・態度で、自尊感情得点に有意差がみられた。一時的な能力や結果より継続的な子どもの特性を褒めることが、自尊感情を高めることが示唆された。叱られた内容としては、母親からのみ、容姿、学業、性格・態度において、有意差がみられた。母親は、容姿、学業、性格・態度について叱る際には、子どもの自尊感情が傷つかないように叱り方に注意する必要があると考えられた。

キーワード：自尊感情、褒め、叱り、親、教師

1. 目的

Rosenberg (1965) は自尊感情を「自己イメージの中核的な概念で、一つの特別な対象、すなわち自己に対する肯定的または否定的態度」と定義している。さらに、「とてもよい (very good)」と「このままでよい (good enough)」という、自分に対する自身による評価の感情として、2つのものがあることを指摘した上で、自尊感情としては good enough の感情が大切だとしている。自己の優越性や完全性に依拠する very good の自尊感情は、それが失われた時にはもろい。けれども、good enough の自尊感情は社会的比較に基づくものではないがゆえに、永続性がある。また Brown (1998) は自尊感情の高い子どもの特徴を、今現在の自分自身に満足しており、自分の長所だけでなく短所についても心得ており、自分の能力や性格に対して非常にポジ

* いのうえ きよこ 文教大学教育学部

ティブな感情を持っている。反対に自尊感情の低い子どもは自分の不完全さ不十分さに注意を向け、くよくよと悩む傾向が強いと述べている。

自尊感情に影響を与える要因としては、社会的階層、人種、宗教などよりも親子関係、親の養育態度などが関与している（古荘 2009）と言われている。また、自尊感情の形成には親からの全面的な受容、愛情及び是認が必要である（蘭 1992）とも言われている。褒められた頻度と自尊感情との間には正の相関がみられ（Felson & Zielinski 1989）、褒められる頻度が高い子どもの自尊感情が高いことが、複数の研究によって明らかにされている（箕輪・向井 2003；福岡県青少年アンビシャス運動推進室 2010；兄井ら 2013；井上 2015）。褒められた経験が自尊感情を高めることは多くの研究で確かめられているが、誰が何を褒めることが自尊感情に影響するのだろうか。また、叱ることの自尊感情への影響については、褒めることほど、明らかにされていない。

本研究では、児童期における母・父・教師からの褒められ・叱られる頻度、内容とその後（大学生時）の自尊感情の高低の関連性を明らかにし、教育や子育て支援に活かすことを目的とする。

2. 方法

（1）対象

研究の目的と方法について説明し同意の得られた文教大学教育学部・文学部・人間科学部の学生 415 名（男性 71 名 女性 344 名、平均年齢 19.55 歳±1.29）。

（2）方法

大学の講義後に研究の趣旨を説明して質問紙を配布し、同意が得られた者から回答結果を回収した。回答は無記名とした。

（3）質問紙の構成

①回答者の属性（所属、性別、年齢）

② Rosenberg が作成し、山本ら（1982）が邦訳した自尊感情尺度 10 項目。（「あてはまる」5 点、「ややあてはまる」4 点、「どちらともいえない」3 点、「あまりあてはまらない」2 点、「あてはまらない」1 点の 5 段階評価で回答を求めた。ただし、逆転項目は 5 点↔1 点、4 点↔2 点に換算してから加算した。）

③回答者が小学校の頃に両親および教師に褒められた・叱られた経験の頻度を「とても褒められた（叱られた）」1 点、「やや褒められた（やや叱られた）」2 点、「あまり褒められなかった（あまり叱られなかった）」3 点、「全く褒められなかった（全く叱られなかった）」4 点として、4 段階評定で回答を求めた。また、褒められた・叱られた内容について、趙ら（2011）がほめられたことについての自由記述を元に分類した 7 つのカテゴリーから 7 つの選択肢を作成し、複数回答可で当てはまるものに○をつけるよう求めた。

3. 結果と考察

(1) 自尊感情尺度の信頼性分析

自尊感情尺度の各項目に関して、信頼性分析を行った。 α 係数は.861であり、内的一貫性は十分であると判断した。

(2) 自尊感情尺度の得点について

今回の対象者の自尊感情尺度の合計得点は最小値10、最大値48であり、平均合計得点は30.40（標準偏差7.11）であった。10項目すべて「どちらでもない（3点）」を選択すると合計が30になることから、今回の対象者の自尊感情の平均値は高くも低くもないと考えられる。井上（2015）では、自尊感情尺度の平均合計得点は30.71（標準偏差6.70）であったため、同程度の結果となった。

自尊感情得点の合計点に男女差があるかを調べるため、 t 検定を行ったが、有意差は見られなかった。そのため、男女を一緒に以下の集計・統計を行って行く。

(3) 児童期に褒められた経験について

小学生の頃に両親や教師に褒められた経験について、4段階評定で回答を求めた。（図1）

母については、「やや褒められた」223名（53.7%）、「とても褒められた」103名（24.8%）、「あまり褒められなかった」83名（20.0%）、「まったく褒められなかった」4名（1.0%）の順に多かった。未回答は2名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した者は326名（78.5%）で8割弱であった。父については、「やや褒められた」187名（45.1%）、「あまり褒め

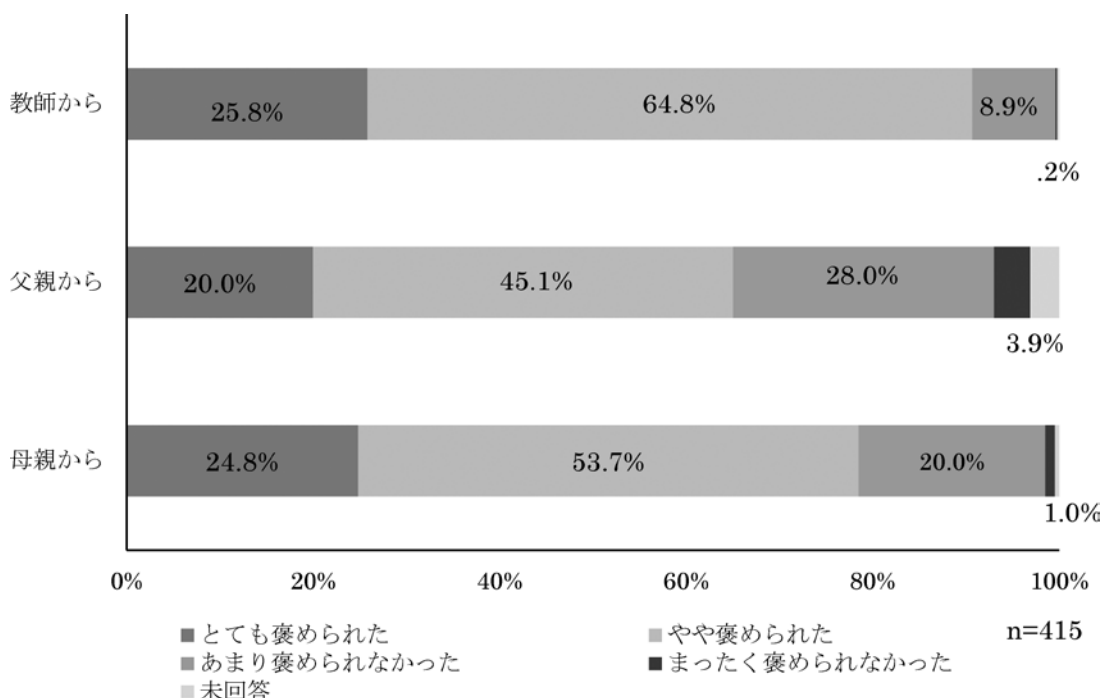


図1 両親と教師からの褒められた頻度

られなかった」116名(28.0%)、「とても褒められた」83名(20.0%)、「まったく褒められなかった」16名(3.9%)の順に多かった。未回答は13名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した者は270名(75.1%)と7割5分であった。教師については、「やや褒められた」269名(64.8%)、「とても褒められた」107名(25.8%)、「あまり褒められなかった」37名(8.9%)、「まったく褒められなかった」1名(2%)の順に多かった。未回答は1名であった。「とても褒められた」「やや褒められた」と回答した者は375名(90.6%)で9割強の学生が教師に「褒められた」と回答していた。全体的に褒められた記憶を持つものが多く、教師、母親、父親の順に多かった。9割以上の者が教師から褒められたと回答していることから、特に小学校の教師は子どもをよく褒めており、それを子どももよく覚えていることが推察された。

(4) 児童期に叱られた経験について

小学生の頃に両親や教師に叱られた経験について、4段階評定で回答を求めた。(図2)

母については、「やや叱られた」190名(45.8%)、「あまり叱られなかった」145名(34.9%)、「とても叱られた」70名(16.9%)、「まったく叱られなかった」8名(1.9%)の順に多かった。未回答は2名であった。「やや叱られた」「とても叱られた」と回答した者は260名(62.7%)と6割強であった。父については、「あまり叱られなかった」163名(39.3%)、「やや叱られた」120名(28.9%)、「とても叱られた」50名(12.0%)、「まったく叱られなかった」69名(16.6%)の順に多かった。未回答は13名であった。「やや叱られた」「とても叱られた」がと回答した者は170名(40.9%)と約4割であった。教師については、「あまり叱られなかった」239名(57.6%)、「やや叱られた」87名(21.0%)、「まったく叱られなかった」72名(17.3%)、「とても叱られた」15名(3.6%)の順に多かった。未回答は1名であった。「やや叱られた」「とても叱られた」者

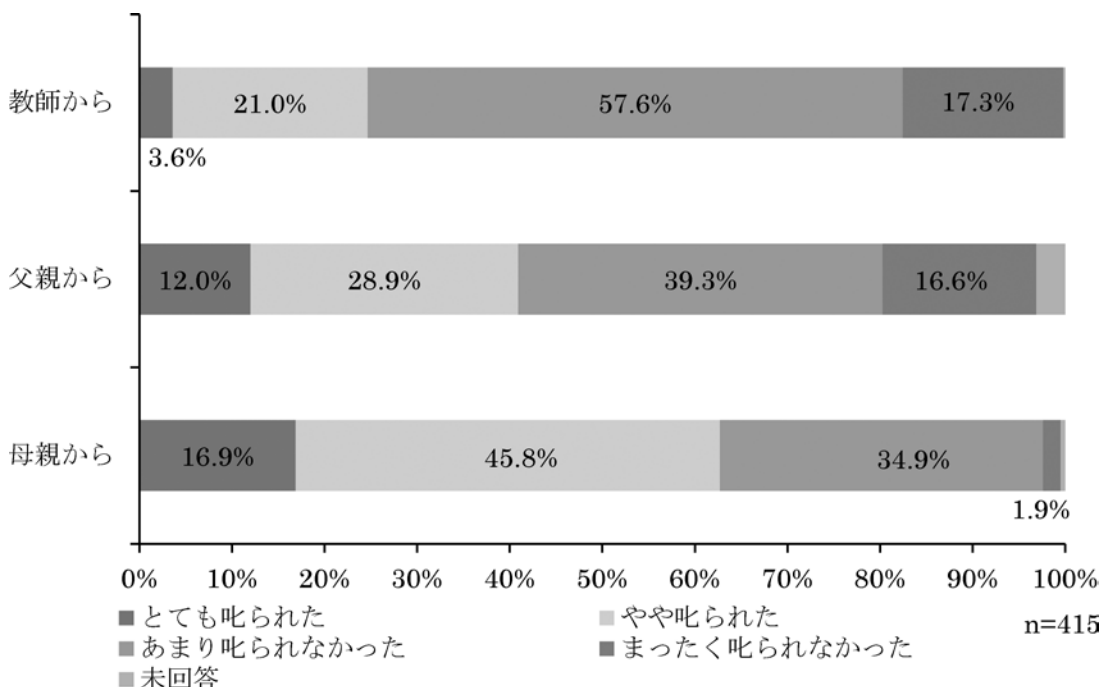


図2 両親と教師からの叱られた頻度

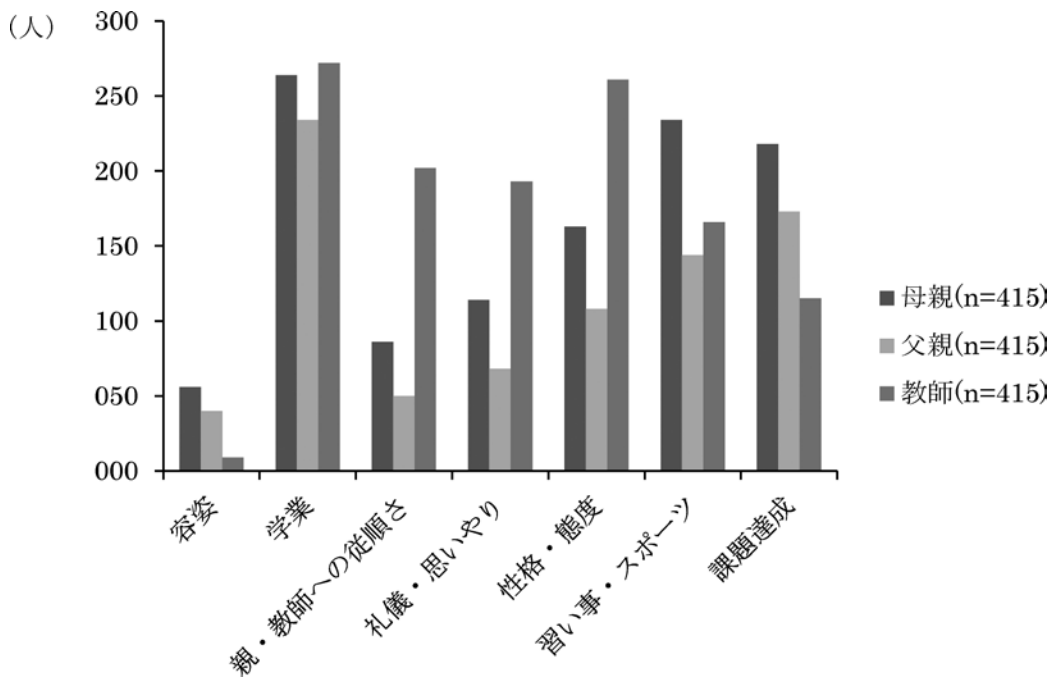


図3 両親・教師から褒められた内容

は102名(74.9%)と7割以上を占めた。

児童期に叱られた記憶は、母親、父親、教師の順に多かったが、褒められた記憶よりは少なく、あまり叱らない風潮が感じられた。

(5) 児童期に褒められた内容について

児童期に褒められた内容について複数回答可で選択を求めた。(図3)。

母から褒められた内容で多かったのは、①学業(成績、勉強、テストなど)が264名(63.6%)、②課題達成(何かをやり遂げた、目標を達成したなど)234名(56.4%)、③習い事・スポーツ(習い事、美術、音楽、スポーツなど)218名(52.5%)であった。父から褒められた内容で多かったのは、①学業234名(56.3%)、②習い事・スポーツ173名(41.7%)、③課題達成144名(34.7%)で、二番と三番が入れ替わっているが、母と同じ内容であった。教師から褒められた内容では、①学業272名(65.5%)、②性格・態度261名(62.9%)、③教師への従順さ202名(48.7%)で、両親とは褒める内容に違いがみられた。

「学業」が一番多いという結果は趙ら(2011)や井上(2015)の研究結果と一致している。「学業」は、テストや成績などで、目に見える結果としてあらわれてくるので褒めやすいのではないだろうか。

(6) 児童期に叱られた内容について

児童期に叱られた内容について複数回答可で選択を求めた。(図4)

母から叱られた内容で多かったのは、①親への従順さ214名(51.6%)、②性格・態度197名(47.5%)、③礼儀・思いやり157名(37.3%)であった。父から叱られた内容として多かったのは、

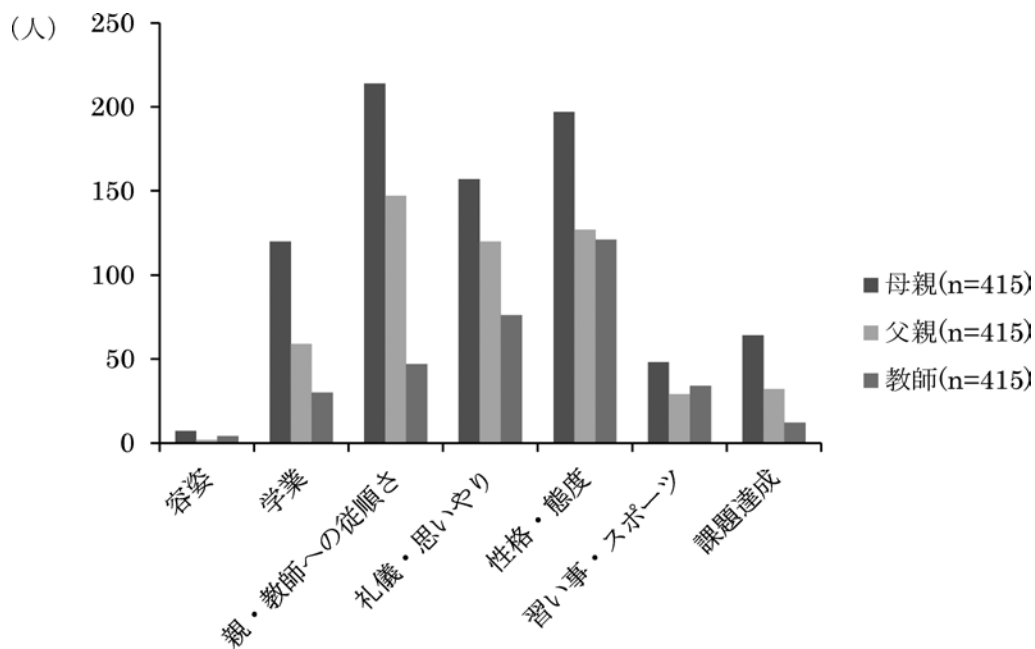


図4 両親・教師から叱られた内容

①親への従順さ 147名 (35.4%)、②性格・態度 127名 (30.6%)、③礼儀・思いやり 120名 (28.9%) で、母と同じ順位で同じ内容であった。教師から叱られた内容として多かったのは、①性格・態度 121名 (29.2%)、②礼儀・思いやり 76名 (18.3%)、③教師への従順さ 47名 (11.9%) で、両親とは順位は異なるが同様な内容であった。

親への従順さや性格・態度、礼儀・他者への思いやりなどは、いわゆるしつけとして重要なことで、児童期ではまだ充分に身につけていないために、叱られることで直され身につけていくと考えられる。

(7) 児童期に親や教師に褒められた・叱られた頻度と自尊感情尺度得点の関連

児童期に褒められた、あるいは叱られた頻度と自尊感情尺度の得点に関連があるかを調べるために、相関分析を行った。(表1)

その結果、自尊感情尺度得点と褒められた頻度では、母親から褒められた頻度 ($r=.27, p<.01$)、教師から褒められた頻度 ($r=.22, p<.01$) の間に相関がみられた。一方、自尊感情尺度

表1 自尊感情得点と褒められた頻度の相関

	自尊感情尺度得点
母親から褒められた頻度	.272**
父親から褒められた頻度	.146**
教師から褒められた頻度	.224**
母親から叱られた頻度	-.085
父親から叱られた頻度	-.009
教師から叱られた頻度	-.056

得点と叱られた頻度の間には、有意な相関はみられなかった。

すなわち、児童期に母親や教師から褒められることが多かった者ほど、自尊感情は高くなる可能性が示唆された。したがって、よく褒めることは自尊感情を高くする要因のひとつであるが、よく叱ることが自尊感情を低くするわけではない可能性が考えられる。あるいは、叱ることは褒めることほど、自尊感情の形成に与える影響は少ないと言えるだろう。

今回の結果では Spearman の相関係数は高くないが、頻度について 4 件法で回答を求めたこともその理由として考えられるため、今後は 7 件法などで回答を求め詳細な調査を行いたい。

(8) 児童期に親や教師に褒められた・叱られた内容と自尊感情尺度得点の関連

自尊感情は基本的に自分で捉えた自分の姿を評価することに基づくが、個人内で完結する純粋に単独の心的活動（個人内過程）という見解と、自他の関係性に基づく（社会的過程）とする見解がある（遠藤 1999）。自尊感情は個人内の過程であるとする研究者の中でも、またいくつかの見解がある。自尊感情を測るときにはその人にとってもっとも価値のある領域でなければ意味がないとする見方と、いくつかの領域により捉えることが有用であるとする見方がある（佐藤 2009）。

そこで、褒められたり叱られたりした内容によって自尊感情得点に違いがあるかを調べるために、自尊感情尺度得点を検定変数とし、褒められたり叱られたりした内容の有無をグループ化変数として、独立したサンプルの t 検定を行った。

母親から褒められた内容として、礼儀・他者への気遣い ($t=2.84$, $df=410$, $p<.01$)、性格・態度 ($t=3.96$, $df=410$, $p<.01$)、課題達成 ($t=2.35$, $df=410$, $p<.05$) などを挙げていた者は、挙げていないものよりも有意に自尊感情が高かった。父親から褒められた内容として、容姿 ($t=2.89$, $df=400$, $p<.01$)、礼儀・他者への気遣い ($t=3.05$, $df=400$, $p<.01$)、性格・態度 ($t=3.62$, $df=400$, $p<.01$) などを挙げていた者は、挙げていないものよりも有意に自尊感情が高かった。教師から褒められた内容として、礼儀・他者への気遣い ($t=3.29$, $df=410$, $p<.01$)、性格・態度 ($t=2.71$, $df=410$, $p<.01$) などを挙げていた者は、挙げていないものよりも有意に自尊感情が高かった。自尊感情の形成には親からの全面的な受容、愛情及び是認が必要である（蘭 1992）と言われている。このような前提条件がない中でいくら子どもを褒めても自尊感情を高めることができない（兄井 2013）。すなわち、両親や教師が、一時的な能力や結果より、礼儀・他者への気遣いや性格・態度など、継続的な子どもの特性を褒めることが、子どもにとっては、受容、愛情、是認を感じる経験となり、自尊感情を高めることに繋がることが示唆された。母親においては課題達成を、父親においては容姿を褒められることも、自己の継続的な特性を褒められたと感じ自尊感情が高まる可能性も考えられた。

母親から叱られた内容として、容姿 ($t=-2.52$, $df=411$, $p<.05$)、学業 ($t=-2.14$, $df=411$, $p<.05$)、性格・態度 ($t=-2.24$, $df=410$, $p<.05$) などを挙げていた者は、挙げていないものよりも有意に自尊感情が低かった。父親や教師から叱られた内容では、有意差が見られた項目はなかった。叱る頻度自体は、自尊感情の形成への影響は少ないが、特に子どもが全面的な受容、愛情及び是認を求めることの多い母親が、子どもの容姿や学業や性格・態度などを叱る際には、子どもが自身の特性を否定されたような印象を受けないように配慮する必要があると考えられた。例えば、容姿や学業や態度などを叱る際、身だしなみが整っていないことや成績が悪かったこと、マイナスの行動をしたこと自体を叱るのは、自尊感情への影響は少ないと思われるが、

「醜い」「頭が悪い」「性格が悪い」など継続的な特性を否定するような叱り方は、子どもの自尊感情を低下させるのではないだろうか。

4. まとめ

児童期における母・父・教師からの褒められ・叱られる頻度、内容とその後の自尊感情の関連性について明らかにする目的で、大学生 415 名を対象に、質問紙調査を行った。

児童期に褒められた、あるいは叱られた頻度と自尊感情尺度の得点に関連があるかを調べるために、相関分析を行った。その結果、自尊感情尺度得点と褒められた頻度では、母親から褒められた頻度、教師から褒められた頻度の間に相関がみられた。一方、自尊感情尺度得点と叱られた頻度の間には、有意な相関はみられなかった。すなわち、児童期に褒められることが多いほど、自尊感情が高くなることが示唆された。

褒められ叱られるの内容によって自尊感情得点に違いがあるかを調べるために、*t* 検定を行った。褒められた内容については、両親や教師とも、礼儀・他者への気遣いと性格・態度で、自尊感情得点に有意差がみられた。一時的な能力や結果より継続的な子どもの特性を褒めることが、子どもにとっては、受容、愛情、是認を感じる経験となり、自尊感情を高めることに繋がることが示唆された。叱られた内容としては、母親からのみ、容姿、学業、性格・態度において、有意差がみられた。子どもにとって最も身近で叱る機会も多い母親は、容姿、学業、性格・態度について叱る際には、子どもが自己を否定されたと感じ自尊感情が低くならないよう叱り方に注意が必要であると考えられた。

引用文献

- 児井彰・須崎康臣・横山正幸（2013）子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究，日本生活体験学習会誌，第 13 号，43-50.
- Brown, B. B (1998) *The Self*, McGraw-Hill.
- 遠藤由美（1999）『自尊感情』を関係性から捉えなおす，実験社会心理学研究，有斐閣.
- Felson, R. B., & Zielinski, M. A. (1989). Children's self-esteem and parental support. *Journal of Marriage and the Family*, 51, 727-735.
- 福岡県青少年アンビシャス運動推進室（2010）子どもの自尊感情と生活のあり方との関係についての研究，福岡県青少年アンビシャス運動推進室特別レポート.
- 古荘純一（2009）日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告，光文社.
- 井上清子（2015）両親・教師からの褒められ叱られ経験と自尊感情の関連について，生活科学研究，第 37 卷，97-105.
- 箕輪早織・向井隆代（2003）叱り言葉・ほめ言葉と親子関係認知子どもの心理的適応との関係，日本発達心理学会第 14 会大会発表論文集，313.
- 蘭千尋（1992）セルフエスティームの心理学：自己価値の探求，ナカニシヤ出版.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and adolescent self-image*, Princeton Univ. Press.
- 佐藤淑子（2009）日本の子どもと自尊 自己主張をどう育むか，中公新書.